次に取り上げる異端と指摘された箇所は、自然本性の問題に
関わる箇所である。

「創造者の愛の内滅却された魂は、良心の呵責や後悔なし
に、自然本性が求め、欲する如何なるものをも自然本性に与え
ることが出来るし、与えるべきである。」

ギョームをはじめとする審問官たちはこの引用文を、自然本
性の無制限な肯定を認め、推奨しているものと見なし、異端箇
所として指摘したと思われる。スコラ学の一般的理解によれ
ば、人間は形相であるところの靈魂に基づいて種的に規定さ
れ、質料であるところの身体に基づいて個別化される。従っ
て、何かを求めたり与えたりするような自然本性は、身体に関
わる個体の自然本性であることになるが、理性の秩序を外れた
欲情は反自然本性的な「肉の欲」と呼ばれるのである。

確かにポレートは自然本性という言葉で個体の自然本性、特
に身体を意識しているが、必要性という概念においてある種の
秩序付けを行っていたことは明らかである。「この自然本性は、
この魂の意志が結び付けられた愛との結合の内変容されたた
めに良く律せられており」、「必要な時を除いて、自分が欠いて
いるものにかかずらうことがない」と言われているように、
「必要性」という限定によって無制限な欲情が否定されている
のである。「我々は理性の非難なしに、四大の奉仕を自然本性
が必要とするあらゆる方法において受け取っています」と言わ
れているように、個体の保全に必要な自然本性は理性ではなく
愛の変容によって、必要性において秩序付けられ、肯定されて
いるのである。

神を巡る意志に関わる異端箇所については機会を改めて検討
したい。

シオランにおける無の位相と展開

藤本拓也

エミール・シオラン(一九二一—一九九五)は、「無 $\parallel$ 無い
こと」に関わる語群を用いて、神や世界や存在について多くを
語ってきた。何かが無いことが示されるために、無、虚無、空
虚、空、空性などの語彙が動員され、あるいは非實在、非存在
など否定辞による表現も目立つ。また無は、自己無化や自己放
棄という動態として、あるいは喪失や不在や欠如という状態と
して表象される。ただし、シオランにおいて無という否定
性は、必ずしも負的な価値付けをされているわけではない。と
はいえ、否定を突き詰めることで、翻って超越を志向するとい
う弁証法的動勢が見いだされるとは限らない。そのことが、無
をめぐる思索においてシオランに特徴的な事柄である。本発表
では、無の様々な位相を画定することを通じて、神を思惟の内
に現成させようとするシオランの試みの一端を示した。

シオランがもつとも頻繁に引用する神秘家はエックハルトと
十字架のヨハネであるが、二人の教説を読み替えた断章は、と
もに、虚無と神との関わりを述べている。シオランは、十字架
のヨハネの無執着と「神への欲求」とを人間の弱さ $\parallel$ 虚無と読

第4部会

み取る。虚無から「神への欲求」が生まれ出るのであり、虚無とは「神への欲求」＝志向性の契機として把握される。その限りで、シオランは虚無を「神性」を支えるものと捉えるのである。虚無が「神への欲求」を生み、虚無の如き人間の弱さが神を支えるという主張は、エックハルトの「根底」の概念の読み替えにおいても窺われる。すなわち、虚無という弱さが神へと直通する「宗教的可能性」であるという主張である。人間は曖昧な存在であるという前提の下で、そうした人間の曖昧さが神の無底的な深さに通じ、無底において神の深淵と人間の深淵とが一致する。主体的自己を形成する境界が溶け出していくような人間存在の曖昧さや弱さは、「虚無の曖昧な波」と形象化され、曖昧さと波を同時に意味する *wave* という語のイメージを軸にして、神の深淵へと虚無が漂い流れていくイメージが喚起される。かくして虚無は、神の深淵に至る「形而上学的源泉」と押さえられるのである。シオランにとって、体験と思索を通して想定しうる限りでの神とは、自然神秘主義的な神でも人格神でもない。神は、人間の側のあらゆる限定・定義を越えたものとして、ただひたすらな無底的深淵として感受されている。ただしそれは、形象を脱却した「深み」として、人間の理性的把握の及ばない無底的深みとしか言いようのない「無限の不在」という情動において感受される神である。このように、シオランにおいて神は、「不在」という状態において、言い換えれば無という情動として捉えられるのである。それは神が存在する／しないという存在論的な水準での言明では必ずしもない。むしろ、シオランにおいて神は、無という情動において、

あるいは無いことに気づき哀しむ情動として、その現前が感得されている。

このように、失われた対象への悲哀は、その遠ざけられている対象の豊かさをかえって逆証してもいる。この意味で、シオランのメランコリーは、所有できない神を所有しようとする欲望として捉えられるだろう。つまり、神が所有できないがゆえに欲望は一段と募るのであり、神への情動は信／不信とは無関係に生き残り続けるのである。あらかじめ喪失の対象があつたのではなく、対象は喪失と同時的に生み出されるということがメランコリーの構造であるが、このことは、失われた対象を遡及的に神として見いだし哀惜するシオランの神への態度と深く関わっている。いわば、一度も所有されることがないゆえに喪失されることもない対象が、あたかも失われたかのように感受されるという意味で、神の喪失とは想像上の喪失である。だがシオランは、不在と欠如という在り様で神と交流し、自らがそこから遠ざけられている神の現前を逆証的に示そうとするのである。

「関係」、「相続」、「あたかも」

—— エックハルトを中心に ——

高木保年

本発表は、「関係」、「相続」、「あたかも」という三つの観点から、マイスター・エックハルトの核心といってもよい思想の